

# 稲門地学会會報

## 堤 貞夫教授 退職記念号

### 巻頭言：鉱物標本に見る我が早稲田人生

稲門地学会会長 堤 貞夫

私が早稲田大学に足を踏み入れたのは戦争直後、今の図書館の所にあった戸塚球場で野球部の練習を見たのが最初であるが、学生として入学したのは昭和 28 年 (1953) 4 月であるからそれ以来、今年で 52 年になる。

親戚が目白台にあったので、上京した折、日本橋や銀座方面へ行くために都電の始発する早稲田へはよく行ったものである。そんな訳で早稲田は子供の頃から知っていたが、人生の大半を早稲田で過ごすことになるとは思ってもみなかった。

学部 3 年生の時だったと思う、喜久井町の理工学研究所の二階にあった岩石鉱物実験室で初めて鉱物標本に出会った。短刀ほどの輝安鉱があったのを覚えている。四年生の時、その一階に研究室の在った岩石鉱物鉱床学担当の早瀬喜太郎先生の指導を受けることになったので、この時から鉱物標本との長い付き合いが始まったと言えるだろう。大学院に進んだとき、所属の研究室が一二階を理工研に明け渡して引っ越すことになったので、顕微鏡や標本をリヤカーで今の六号館の屋根裏部屋に運ぶ日が続いた。聞くところによると鉱物標本は元々この屋根裏部屋にあり空襲で焼け出されて喜久井町へ移ったのだそうである。松本清張の「石の骨」のモデルといわれた直良信夫先生の明石原人の化石も此処にあったのだろう。

引っ越しをしたこともあり、推薦校友の若林速雄さんからの寄贈標本も加わったので、鉱物標本をカードによって整理することになった。鉱物種ごとに番号を付けることになり、Dana の System of Mineralogy I、II 巻の番号を採用することになった。しかし、Dana には当時、肝心の珪酸塩鉱物がなく Strunz の Mineralogische Tabellen を利用して、Dana で珪酸塩鉱物版が出たら付けられるであろうと思われる番号を付して珪酸塩鉱物を整理した。亡くなった大塚良平先生や多くの人に協力してもらったが最近そのカードを見ているうちに任さんという母、姉を日本に残して祖国北朝鮮へ行った女性の書いたカードが多いのに気づいた。今頃如何<sup>どう</sup>しているだろう。

創立 80 周年を機に理工学部が大久保へ移転、教育地学が発足することになり、標本を分けて一 종류づつ一標本を理工に、他は全て教育地学に置くことにした。この時に教材として岩本鉱産物商会の標本 300 個数 2 セットが加わったのである。結晶模型や岩石標本もこの時一緒に購入されたのである。こうして現在の 14 号館前のスロープのところにあった 13 号館の二階



に移された地学の標本はその後昭和 43 年教育学部棟の 16 号館ができるに及んで三度その六階へと移されたのである。

鉱物採集、巡検、卒論、研究など地球科学専修が歴史を重ねるにつれて鉱物標本もその数を増していった。昭和 49 年 (1974) 私は在外研究で一年間アルゼンチンの南部国立大学に滞在したが、早瀬・Dristas 教授らと共にパタゴニア産の Surite という炭酸鉛を層間に挟む粘土鉱物を記載した。早稲田で鉱物種としての模式標本があるのはこの一種の鉱物だけである。因みに早瀬先生の記載した幌別鉱は輝安鉱と輝蒼鉛鉱の固溶体であるので鉱物種としては認められていない。この一年間にアルゼンチンをはじめチリ、ペルー、ボリビア、ブラジルなどの鉱山を廻ったので教室の標本に南米の標本が多数加わった。

地学専修の開設に尽力された矢嶋澄策先生が水銀鉱床の専門家であったことと、早瀬喜太郎先生と私が硫黄鉱床を研究対象にしていたことからわが教室の鉱物標本の中で、水銀と硫黄の標本はその成因に配慮し、産地を網羅したもので他に誇れるものとなっている。

私の理事時代に標本にとって喜ばしいことが三つあった。その一つ目は図書館を通して校友の遺族から鉱物標本の寄贈の申し出でが寄せられたことである。大正七年 (1918) 理工学部採鉱冶金学科を卒業され、その後母校の講師を務められた服部元文さんの集められたものである。思えば大学院時代に早稲田祭で展示標本としてお借りしたことのある標本であり、約 1000 点ほどの標本でその質の良さは抜群である。二つ目は商学部の宮下教授から商学部の屋上室に商品見本として鉱物標本があるとお聞きしたことである。その後 350 点の標本をわが教室に移管して貰ったが包まれていた新聞紙の日付が昭和 24 年、終戦直後の未使用の標本で、当時我が国で稼行されていた諸鉱山産の珍しいものもあった。三つ目は私と同期、昭和 32 年に政治経済学部の新開学科を卒業され現在、宝飾業を営む民谷晴亮さんから大型の翡翠<sup>ひすい</sup>の原石を寄贈されたことである。翡翠のほかには何点かの大型標本が含まれているが、そのうち最も良質の原石と翡翠の製品が旧図書館の会津八一記念館に展示されている。これらの翡翠の原石には産地として有名なビルマ産のものも含まれており、国内でこれまで知られている殆ど全ての産地からの大型標本である。

地学専修の第一期生が四年の年、昭和 43 年 (1968) に 16 号館六階に移転されたこれらの鉱物標本は学内をあちこち引き回されて漸く安住の地を得たかに思われたが、五年前の平成 11 年に最初に標本の置かれていた旧理工学部六号館の建物に移ることになった。折から大学は新棟の建設が相次ぎ、竣工までの仮教室として利用するために教室が不足し、移転前は専用の標本室が与えられる約束であったが叶えられず、結局、二階の廊下に並べられることになった。新棟完成後は是非とも標本室を確保したいものである。



私の鉱物標本と引越しの早稲田人生もあと半年ほどになった。採鉱冶金<sup>やきん</sup>から引き継がれた標本は以上述べたように何度も引き回され、壊れたり産地が不明になってしまったものもあるが服部標本や商学部標本などは健在である。この際、鉱物標本の過去の履歴を記しておくことが努めであると考え、現在複雑なデータをパソコンに打ち込んでいるところである。

## 堤先生へ—教室教員から—

### 『坂クン 何いているのか分からないヨ』

坂 幸恭

学部教授会に出席しても馴染みのない顔ばかりとなりました。いうまでもなく退職された先生の後任で、教授会の席にいるから本学部教員なのだろうと判断されるものの、町中ではもちろん学内で出会ってもそうとは分からないでしょう。校歌の一節『集まり散じて人は変われど…』は学生諸君だけではなく、教職員にも当てはまります。その周期が少し長いだけです。この不可避の法則にしたがって堤先生が本年度いっぱいでお退きになります。昨年の会報（23号）の巻頭言をご覧になってもお分かりのように、教室開設時の状況に通暁してみえる重鎮がまもなく教室を去られるにあたり、残念かつ不安な思いを禁じえません。

昭和42年私は堤先生が最年少であった教室に助手として着任し、最年少の地位を譲り受けました。今の紳士的かつ穏やかな助手諸君と違って私は生意気そのもので、最長老で教室開設者の大杉先生をはじめ各先生方に喰ってかかることを生き甲斐と心得ていました。よくも臆首にならなかったものと当時の先生方の寛容さに敬服している次第です。

4、5歳上の堤先生は私にとって兄貴分でした。我が儘を通したり、迷惑をおかけすることも数知れず、当時飯能にあったご自宅に深夜押しかけたこともありました。結婚披露宴の司会までお願いしました。

‘追い出しコンパ’など、教員を揶揄する各研究室の出し物で、私は‘セッカチで聴き取れないせりふを発する重度喫煙者’と決め付けられています。早口に加えて不明瞭な発音、この性癖を面と向かって指摘し、改善を促してくださったのが兄貴分でした。着任後まもない頃、テーマは忘れましたが、滔々と弁じている最中に、当の相手の堤先生が私の弁舌を遮って一言、「ちょっと坂クン、早口過ぎて何いているのかさっぱり分からない。そんな状態じゃあ職を全うできないヨ」。大変なショックでした。以後今日に至るまで、講義やら会議での発言やら、とにかく他人と話をするときには必ずこの言葉が頭をよぎります。上にも述べた通り今もって改善されていませんが、本人はこれでも努力しているつもりです。

堤先生には、このほかにももっと大切な忠告やら指導を数多くいただいているはずなのですが、申し訳ないことにこれが最も強烈に脳裏に焼き付いています。私も堤先生の人生に貢献していないわけではありませんが、気の毒なほど酒に弱かった先生を世間で通る程度に飲めるまでご指導申し上げたのは私である、と密かに自負しております。

### 20余年前の堤先生

平野 弘道

私は1977年に着任した。今から27年前のことである。従って、今から俎上に載せられる方々は皆今より27歳若かったことになる。それぞれの先生方の年齢をあらためて書くと、個人情報のうるさい時代であるので、差し支えがあるかもしれない、書かないことにする。各自で計算していただきたい。

当時の情景で記憶に残ることは、毎月教授会・教室会議の終了後、殆ど全教員で飲みに行ったことである。一軒目は「しのぶ」であることが多かった。北門から新目白通りに向かって家並みを入ったところである。今は隣に「鷹ばん」がある。堤先生以上に鞠子先生が「しのぶ」のおでんを随分食べられたように記憶する。因みに、本稿の主人公ではないが、鞠子先生は「つみれ」がお好きであった。

「しのぶ」とは別に、北門を出てグランド坂を下がったところに「まずい酒・水っぼい酒」とかいう店があっ

た。お酒が一台瓶のまま出てくる。決して看板に書かれているような、水っぽい酒ではなかった。焼き鳥やウズラのゆで卵の串さしがあり、手軽に腹を満たすことができた。堤先生は研究室の学生と一緒に行かれたのではないだろうか。この店の椅子に座ったときの思い出す場面には、堤先生のほかに、鞠子先生、山浦さんが登場する。残念ながら、親爺が秋田かどこかの故郷に帰ってしまっただけで無くなった。

大分後になって、「若竹」という店が、先日廃業した「串亭」の奥にできた。何かで問題を起こした仕立屋の屋敷の向かいであった。若いときには相当色っぽかったであろうと思われる細身の女将さんと旦那で切り盛りしていた。旦那一人で料理しているので、時間がかかった。柳川、ウナギの蒲焼き、旬の刺身、鍋料理、等、学生が行くにはやや高めだが、それだけに教員が会議のあとに行く店としては適当であった。ある時期から、社会科の教員も行くようになった。

二次会は西武新宿駅の近くの「TOY」がレギュラー・コースであった。当店での思い出す場面には堤先生のほかに鞠子先生と坂先生、山浦さんが登場する。この店も後に廃業した。マダムの柴田さんが別姓になったからである。

三次会は、新宿厚生年金会館地下の「あかね」であった。折に触れて行っただけで、アルバイト店員が水商売の人間としてはありうべからざる言動に及んだので、以後びたりと行くのを止めた。

教室忘年会は、かなりの期間、堤先生のご紹介で後樂園白山下の「天馬」を利用した。東大教授が行く店とか週刊誌に紹介されたが、実は早稲田大学教授が行く高級な店であった。全国の地酒がショウ・ウインドウに多数配列されていた。2階の宴会部屋を出て、階段に座り込んで、次はどれにするか、坂先生が選んでいた。坂先生は目下一年以上禁酒中である。人間社会には信じられない現象が起こるものだ。ある年の忘年会では、およそ人間が飲めたとは思えないほど莫大な量を皆で飲んだ。この頃の私はまだ、食べ、かつ飲み過ぎて次の店に移動する途中で吐いたりすることがあった。堤先生は、そのような愚かな飲み方はされなかった。私も今では、「決して吐かない」と言ってもまずまず良い状態になった。堤先生をはじめ、教室の先生方の薫陶くんとうのたまものである。記して謝意を表したい。

## 「先輩！」との縁えにし

円城寺 守

堤先生との接点はいくつもある。

学生時代は学生運動の華やかなりし頃で、正規の授業がとても少なかった。学園紛争は授業ボイコットやストライキの形で大久保キャンパス理工学部をも襲ったのである。大学院進学を目指していた者数名が悲壮な危機感を感じ、指導教員の紹介で門をたたいたのが教育学部地学教室であった。

当時、鞠子先生と堤先生とがおられ、資源工学科の先輩のお二人から鉱床学と鉱物学の話聞くことができた。これが、他大学受験に極めて有効に働いたのはいうまでもない。かれこれ 40 年前のことである。

前任校の筑波大学時代。これももう 20 年も前のことである。院生の指導で群馬県大清水にある根羽沢鉱山の金鉱床を調査していたときのこと。鉱山周辺の岩石の調査をしているとき、全くの偶然で、堤先生にお会いし、いろいろなご教示を受けた。後から知ったのだが、赤城に山荘をもっておられるとのことで、まあそんなに不思議な邂逅でもない。ただ、先生に黙ってその地域を調査しているようでなんとなく気恥ずかしかった記憶がある。というのも、昔は、地質屋に縄張りみたいなものがあって、他人が研究している地域に

入るときには仁義を切る必要があった（そんな場所があり人がいたという）という話を聞いたことがあるからだ。

その後、その院生はこの教室の助手を3年間勤めた。小生も亦<sup>また</sup>この教室に赴任することになって、今この文章を書いている。奇というほどではないが、いかにもの縁を感じる。

大学時代には天文同好会というサークルに所属していた。設立後2～3年しか経ってはず、実質的にわれわれの代が作ったといっても過言ではない。このサークルには大分入れ込んで、かなり濃密な友人関係もできた。この頃のサークル活動は気合が入っていて、日食観測に遠征したり、流星群が来るたびに各地を彷徨ったりしたものだ。学園祭はそんな成果の見せ所で、さながら学会のポスターセッションであった。

近年サークルの是非が取り沙汰されているが、学問もサークルも要は本人の気持ちの持ち様であることはいうまでもない。このサークルは当時から部室をもっていて、それが6号館の屋上に観測用小屋としてあった。それから35年して、またこの同じ建物に戻ってきたのも何かの縁であろう。

さて戻ってみると、堤先生がこのサークルの顧問をしておられた。当時は数名で始めたこのサークルが今では常時数十人を擁して営々と続いている。これはひとえに堤先生のおかげである。先生のご退任の後はこちらにその任が回ってきそうな気配である。

着任以来、先生には教室のことを何かにつけて教えていただいた。私大における授業のやり方もそうだ。学内の教員のあれこれもそうだ。研究室が近いせいもあって、いつも声をかけていただいた。いろいろな場所にも案内していただいた。「志乃原（そば）」「レッドピーマン（洋食）」「源兵衛（焼き豚）」「土風炉（炉辺焼き）」「信（×××）」などなど。どこも思い出がいっぱい詰まっている。

「先生」とは一味違う「先輩」という言葉の意味を重く実感するこの頃である。（このことを学生に話したら、「先生！」といわれるべき場所で「先輩！」と呼びかけられ、妙な気持ちになったものだ。）

この縁はまだまだ切れそうにない。

先輩！！ ますますお元気で、今後もしろいろと教えてください。

### 堤 貞夫先生のご退職に際し

高木 秀雄

私が早稲田大学に助手として着任したのは1982年、ちょうど早稲田大学100周年の時でした。助手としての3年間、私はそれまで堤研究室でもあった標本室の一角にスペースをいただき、もともと子供の頃から鉱物採集に興味があった私は、ときどき堤先生が集められた見事な標本を眺めながら自己満足しつつ過ごしました。そのときから堤先生は教務主任をなさっており、引き続き学部長、教務担当常任理事、と学部・大学の要職につかれ、その激務から解放されたのもつかの間、早稲田中・高校の校長として、活躍されました。また、バスケットボール部の部長としても活躍され、幅広い人脈を築いてこられました。堤先生をひとことで表せば、「親分肌」だと思います。その堤親分を慕って卒業生・在学生が集まっていた有名なバラの会は残念ながら継続されていないようですが、実は私が最も心残りなのは、まだそのすばらしいバラを拝見していないことです。今年こそはぜひと思っていましたが、ご病気になられ、かないませんでした。いまはお元

気になりましたので、来年にはお伺いしたいと思っています。地球科学専修の歴史をよくご存知の先生が抜けることは、今後の歴史を築くべき私たちにとっても、とても不安でありまた残念でなりません。先生が集められてきた貴重な鉱物標本をきちんとした形で整理、陳列できるように、できる限りのことをしたいと存じます。また、ご退職後も、125周年の理工系再編について稲門地学会で先生に良い報告ができるように、ベストを尽くす所存です。最後になりますが、心より先生のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

### 「教室の外での堤貞夫先生との思いで」

小川 誠

堤先生と初めてお会いしたのはちょうど10年前、当時の地学教室で新規教員の候補にいただき、懐かしい16号館6階のエレベーターホール前の狭い部屋で、面接を受けた時のことです。実質的には1995年4月に専任講師として着任して初めて個人的にお話しする機会もできた訳で、この記事を目にされる方のほとんどは、私より多くの時間を堤先生と共有されていて、講義、研究、巡検などのアカデミックな話、さらには教室伝統のコンパなどでのエピソードは他の記事で紹介されることと思います。そこでこの記事では堤先生の印象と思い出を紹介したいと思います。

一言でいうと「遊び上手」な先生というのが私からみた堤先生の印象です。先生がバラを始め多彩な趣味をお持ちであることは有名ですが、幸いその多趣味、多才ぶりの一端に触れる機会がありました。卒業生の方も記憶されていることと思いますが、私が着任した当時は新入生オリエンテーションの1日目に本庄セミナーハウスでソフトボールをして教職員と新入生との交流を図っていました。教室での穏やかな印象とは違って、スポーツウェアに着替えられた先生は見るからに軽快で、実際グラウンドでの鮮やかなフットワークとスローイングはとても還暦をすぎた方ものとは思えないほど若々しく、驚くとともに感心しました。数年前からオリエンテーションのコースが変更になり、グラウンドで一緒にさせていただくことがなくなったことが残念です。

これも最近は機会が少なくなりましたが、カラオケも先生の多才の一つではないでしょうか。教室の忘年会の2次会は堤先生のなじみの店に行くのが定番で、多くの場合はカラオケがそこにありました。そしてここでは先生の美声を楽しむことができました。殊に石原裕次郎(ご自身はもっと他に十八番があるとおっしゃるかもしれませんが、あくまで私の趣味であること悪しからず…)は絶品で、お酒(ご承知のように教室で飲むときの1次会の酒量は少なくありません)で高揚した私は思わずうっとり聞き惚れてしまったものです。「赤いハンカチ」を勝手にリクエストして、先生に歌って頂いたこともありました。

新歓コンパ、追いコンなど独特の仲間意識があるこの教室は縦のつながりが薄くなりがちな最近の社会の中では貴重であると思っています。このようなよい教室を築かれた堤先生の教室創設以来の長年のご苦労に改めて感謝するとともに、早稲田らしくない(らしいのかな?)教室の雰囲気在今后も大事にしていきたいものだと思います。最近は何かと慌ただしく大学にもゆとりがないように(もちろん卒業生の皆さんがいらっしゃる社会も同様だと思います)と思いますが、卒業生も集って「遊べる」余裕が欲しいものだと思います。堤先生どう思われますか?

## 堤先生へ—堤研卒業生から—

### 「環境と廃棄物（ごみ）」何でも屋の一文

原 雄（第2期）

堤先生は本年10月30日に、古希を迎えるとのこと。皆様ご承知のことと思いますが、長寿の賀は61歳（還暦）からはじまり70歳（古希）、77歳（喜寿）、88歳（米寿）、99歳（白寿）歳と続きます。古稀の賀の風習は杜甫の曲江詩の中にある

朝回日日典春衣 每到江頭尽醉歸  
酒債尋常行處有 人生七十古來稀

「人生七十古來稀」の句に由来するのだそうです。私がいうのも何ですが、今では古希は通過点でしょう。

さて、私は現在、千葉県の環境研究センターというところで廃棄物・ごみ問題に取り組んでいます。出発点は堤先生の研究室での卒業研究でした。卒業研究のテーマは正確には覚えておりませんが、確か「安山岩の変質」であったと思います。これを機に地盤沈下・地下水汚染等々、そして10年前より廃棄物・ごみ問題に取り組んでいます。

そのうちの焼却・溶融の問題は私たちセンターの仲間では手に負えないところもあり、お願いしまして研究室の卒業研究のテーマとして「焼却灰と焼却飛灰の性状」、「焼却灰からの重金属回収やゼオライト合成」、「溶融スラグの性状」を取り上げて頂きました。これにより、1996年から永井君、大石君、加藤君、西山君、岩崎君、坪田君、成川君、山田君、宮川君、菅原君、滝口君、中里君らと時に厳しいこともありました。楽しい時間を過ごすことができました。厳しいことは彼らではなくて、じつは私の方でした。地盤沈下や地質汚染に携わっている間に、鉱物学の知識や偏光顕微鏡、X線回折法、蛍光X線分析法、熱分析法等々のこと全部お返ししていることに気づき、もう一度勉強し直すという機会を得られたことは、幸甚でした。今は、永井君をはじめとする彼らとの研究をまとめることを私へのプレッシャーとしています。

### 堤先生から学んだこと

唐崎 秀芳（第11期）

地学に入学したのが1974年。いつの間にやら30年も昔のことになってしまいました。さて入学したばかりとはいえ、4年次生で希望する研究室へ進むためには、指定された科目を履修しておかなければいけないので、自分はどの研究室へ進むのか、ある程度決めておく必要があります。私はフィールドが苦手なので、必然的に室内で実験が出来る研究室に絞られ、最終的には堤研究室へ行くことに決めました。

堤研究室へ進むためには、分析化学や鉱物学関係の科目を履修しなければなりません。当然のことながら堤先生の授業やゼミも受けたのですが、卒業してから25年近くも経つと、どのような授業を受けたのか、ほとんど思い出すことが出来ません（堤先生、申し訳ありません）。ただ少しばかりですが、今でも忘れることなく記憶に焼き付いていることがあります。

- (1) こんなペースでやっていたら卒論なんか終わらないぞ。
  - (2) TAだったら、自分のほうから今日の授業の準備は何をしたらいいか聞け。
- 1番目の卒論の件については、実験を適当にマイペースでやっていたところ、秋の早稲田祭の頃になって、

卒論はどうなっているかと堤先生から聞かれ、「これこれこうです」と報告したところ、このように注意されたため気を入れ直し、その後は必死になって毎日、朝から夜まで実験に精を出して、何とか卒論を完成させたということです。

2 番目の TA の件については、卒業後 1 年間、堤先生の授業の TA をやっていたのですが、私は堤先生から指示があるのをいつも待っていただけだったため、どうやら堤先生も堪忍袋の緒が切れたようで、「こんなことではやってもらいたいことがあっても頼むに頼めない」と注意されました。今になって思えば、全く以て世間知らずの私でした。

現在の私は鉱物学とは全く関係の無い、大妻女子大学の情報メディアセンターで学内ネットワークや情報処理実習室のコンピュータ等の管理運営を行い、教職員や学生からの質問等に対応したりしています。学生が質問に来ると、私はいつも自分が学生時代に堤先生から注意を受けたことを思い出し、当時の自分と質問に来ている学生を頭の中でだぶらせながら、適切な助言指導を行うように心がけている毎日です。これも堤先生から研究面だけでなく、人として厳しく適切な指導を受けたおかげだと思っています。堤先生、長い間お疲れさまでした。

### 堤先生と鉱物各論

林 政彦 (第 12 期)

1975 年に入学し、最初に学ぶ専門科目の一つが、堤先生の「鉱物学及び実験 I」であった。ある著名な鉱物学者が「…地球は物語をしている。そこに用いられて言語を地球語と呼ぼう。鉱物はその単語である…」と話されたことがあるが、まさしく堤先生から最初の“単語”を教わったのである。この授業では鉱物各論の重要性を説かれたことが今でも強く印象に残っている。

授業の合間に、鉱物各論に記載されている鉱物の産状を実際に見に行きたいと思い、堤研を訪ねた時に応対して下さったのが故田中耕平さん (1 期・当時非常勤講師) であった。堤研に行けば、鉱物の最新情報について西戸裕嗣さん (8 期・当時院生) から伺うことができたし、その他にも個性あふれる諸先輩からいろいろと学ぶことが多かった。何と云っても、鉱物標本に囲まれた研究室は“堤研だけの特別な空間”に見えたものである。

少し私事になるが、私と鉱物との最初の出会いは、小学生の時に家族で登った高尾山のお土産として買ってもらった標本である。箱の中に小さな鉱物と岩石の欠片が一緒に混ざって入っているものであった。一般には、このような標本のように鉱物や岩石も同じ“石”として取り扱われ、それらの違いや鉱物の並べ方について、あまり注意が払われていないように思う。ところが、大学の鉱物標本は、鉱物の教科書を著した Strunz の分類に従って整然と並んでいる。これらの標本には、私の採集した鉱物もいくつか含まれているが、諸先輩の素晴らしいものには及ばない。堤先生が研究の合間に整理された鉱物標本が、もっとたくさんの人に観覧されるのを望むものである。そのためにも早稲田大学には未だない理工系の博物館を設立し、そこに展示できればと願っているのは私だけだろうか。

堤先生は、鉱物を研究するためにはフィールドへ行き、常にいろいろな鉱物の産状を観察する大切さについて話された。そして、実際に卒論の学生達と一緒にフィールドへ出掛けられている。フィールドでは、動物や植物の観察と同じように時間をかけてじっくり眺めることによって、胸躍るような新しい発見につながり、現在日本産 Surite :  $\text{Pb}(\text{Pb}, \text{Ca})(\text{Al}, \text{Fe}^{3+}, \text{Mg})_2(\text{Si}, \text{Al})_4\text{O}_{10}(\text{OH})_2(\text{CO}_3)_2$  (単斜) の発見が期待できる。私も微力ながらその発見のお手伝いができればと思っている。



## 堤先生との出会い

伊藤 敦夫 (第17期)

思えば人生の節目で堤先生に導かれた。昭和55年4月早稲田大学教育学部地学専修に入学した私は、堤先生が鉱物学の授業で話された「固体の95%以上は結晶であり、鉱物の多くもまた結晶である」という言葉にまず導かれた気がする。基礎的で、いってみれば“つぶし”が利くことを勉強したかった当時の私は、鉱物学こそが(固体)地球科学の基礎であると確信(誤解?)した。ある時、堤先生に連れられて我々1年生の学生数名が鉱物採集に行くことになった。堤先生が地学教室のランドクルーザーを運転して茨城県真壁町山ノ尾、笠間市稲田を巡ったのであるが、最初に訪れた山ノ尾で大きさ約3mmの正24面体のガーネットを採取し、その幾何学的美しさに感動してしまう。本や教科書で図を見ると実際に採取するのは大違い。「自然とは無秩序なもの」と信じていた自分の固定観念はそのとき脆くも崩壊し、「何故、無秩序なはずの自然から規則正しいものが生まれるのか」という疑問が脳をしばらく占拠してしまう。そのようなことがあって、私は基礎的で神秘的な鉱物学にのめり込むようになった。その後は、“鉱物学→結晶構造解析→生体結晶→バイオセラミック→ティッシュエンジニアリング(再生医工学)→第3世代バイオマテリアル”と研究分野が推移して現在に至るが、卒業後も堤研究室の学生さんと一緒に8年間にわたり研究する機会を与えていただき、支えていただいた。

教育学部地学教室に入学した日から早くも25年の歳月が流れようとしている。堤先生、これまで長い間お世話になり本当に有難うございました。

## 堤先生、本当にありがとうございました

上原 元樹 (第22期)

今年の夏休みに研究室のゼミ合宿に参加させて頂きましたが、先生もお元気な御様子で安心いたしました。アルゼンチン仕様のオリーブオイルを振りかけたバーベキューも美味しく、学生と20年ぶりに麻雀をすることも出来ました。それにしても、学生諸君がてきぱきと行動していて、私の時代とは大違いでびっくり。私の場合、いつも叱られっぱなし。新入生ガイダンスに遅刻した学生に雷を落とす堤先生を拝見したのが、地学教室における学生生活の始まりだったくらいです。北海道巡検ではルートの途中でバスに見知らぬ女の子を乗せ、大目玉(ちなみに女の子を乗せたのは私ではありません。デブの私では誘っても…)。怒られて当たり前なことばかりですね。初めて参加した「薔薇会」では、バーベキュー用の炭を上手に熾せずに、正座して先生のお説教を聞くこととなりました。今では笑い話です。それでも、いつも柔和な御様子の先生は、大変な人気で研究室配属時に堤研究室を第一希望とした学生が30人近くいたと記憶しています。結局、3,4回の面接後14人が堤研究室の配属となりましたが、他の研究室に行くように説得されたのが昨日のこのように思い出されます。図々しく、それをかたくなに拒んだため、堤研究室配属となりましたが、それからこんなにも長くお世話をお掛けすることになるとは夢にも思いませんでした。ところで、私はまだ堤先生と麻雀卓を囲んだことがありません。遅咲きの麻雀デビューとなりますが、是非とも一戦交えたく、これからも先生を囲んで「ワイワイ」出来ればと考えております。御迷惑かもしれませんがその節には何卒よろしく願い申し上げます。

さて、私の卒業研究のテーマは「Surite(スーライト)の合成」でした。この鉱物は、アルゼンチンで発見された鉱物で、発見当時からその合成が試みられていました。おそらく、明礬石・鉄明礬石のテーマに次いで、かかわった方が多いテーマだと思います。案の定、なかなかうまくいかず、合成できるまでには後輩

諸氏の手をお借りして5年ほど掛かりました。先生に「合成できたこと」を御報告したとき、大変お喜びになり、「今までスーライトに携わった者を集めてパーティーをしなくては」とおっしゃって頂いたことが強く印象に残っています。ただ、当時先生は大学理事として多忙を極めており、また私が不精なため実現できなかったことは申し訳なかったと悔やまれます。

学部～博士課程、助手、客員研究員として12年間、現在でも研究の御助力を頂いており、早いもので、もう20年近くも堤先生にはお世話をお掛けしどおしです。私は生来のひねくれ者のため、ずいぶんと御苦労をお掛けしたものと存じます。これからも御迷惑をお掛けすることが多々あると思いますが、先生には御健康にお気を付けになられて、末永く御指導頂きたくよろしくお願い申し上げます。本当にありがとうございました。

### 堤先生、どうもありがとうございました

浅香 透 (第28期)

ちょっと早いのですが、堤先生、お疲れさまでした。

私は研究室の学生として6年間、そして昨年まで地球科学教室の助手として3年間、堤先生にはお世話になりました。残念ながら研究室の最後の一年には立ち会うことができませんでしたが、幸い研究室の修士の学生が私のいる研究所に研究生として来ているために、未だに堤研究室とは接点があり、先生にはお世話になっております。

先生が60歳から70歳になられるまでの10年間近く、私は先生と接していたこととなります。その10年間を振り返って思うのは、失礼な言い方かもしれませんが、歳をとられるごとに「丸く」なられていったことです。もちろん丸くなられたのは体型ではなく性格です。こんなことを言うと先輩方は自分たちのときの方がもっと先生は厳しかったと思われる(思い出される)のだと思います。それでも私が研究室に入ったころは、事あるごとに叱られていた気がします。5月の中旬に例年行われていた通称「バラ会」でまず叱られ(失礼なことに今では何で叱られたのか思い出せません)、当然、一年を通して色々なことで叱られ、卒業前に先生が私どもをご自宅に招いてくださったときも結局は叱られていました。当時、叱られていた内容は、だいたい大人としての礼儀であったり、マナーであったりで今考えると当たり前のことだった気がします(大学生にもなるといふ感じですが)。こういうことをきちんと叱って教授してくださった先生には今は本当に感謝しています。こんな学生生活をおくっていただけだったので、私にとって、先生は(ちょっと言い過ぎかもしれませんが)恐れ多いという認識が少しあります。しかし、最近の学生はもっと先生とフレンドリーに接している気がします。後輩たちに聞いても先生は優しく、なんでも話しやすいという印象を持っているようです。たぶんそれは、ここ数年の先生が常に優しい笑顔で周りの人に接していたためだと思います。私が助手で在職中のときもいつも声をかけてくださり、時には雑談をして気持ちを和ませていただきました。

堤研究室の思い出は良いものばかりなのですが、ただ、一つ心残りなのはバラ会がなくなってしまったことです。バラ会は堤先生のお宅のバラを愛でながら行われるOB・OG会です。毎年、たくさんのOB・OGの方がいらっしゃって、非常に楽しい時間を過ごせるものでした。しかし、私が幹事をやっていたある年に先生はバラ会を中止されました。とても残念だったのですが、私の力では先生のお気持ちを変えることはできず、それから今までバラ会は開かれていません。多くのOB・OGの方は未だにバラ会が再開されるのを待っています。先生、ぜひバラ会を復活してください。今度は先生に負担をかけないように、がんばります。まだまだ、書き足りませんが、堤先生、本当にお疲れさまでした。そして、本当にどうもありがとうございました。

## 教室便り

地球科学専修前主任 高木 秀雄

この教室便りがお手元に届く頃には、坂 幸恭教授が新しい専修主任になられていますが、昨年の教室便りの約束がありますので、簡単に学部・大学院の再編の状況をお知らせして、私の主任としての教室便りを結びたいと思います。

すでにご存知と思いますが、理工学部・大学院は6月上旬に3つの学部・大学院に分割することがプレス発表されました。名称は、先進理工学部・大学院、基幹理工学部・大学院、創造理工学部・大学院で、私たちが現在所属する地球・環境資源専門分野は材料理工学専門分野と別れて専攻に昇格し、創造理工学研究科に加わることになります。また、先進理工学部には新しく「生命医科学科」という生命系学科が新設され、そこに教育学部の生物学専修の教員が移籍する予定です。一方、生物学専修の教員が移籍後の教育学部理学科は、数学科と分かれて現在の教員・学生定員を保ちつつ新たな理学科に再編される予定で、その新理学科の具体的な話が地球科学を核として進む予定です。文科省の届け出の関係で理工学部・大学院の2007年度再編に歩調を合わせる必要がありますので、今年度後半には具体案が話し合われます。結局、今年も再編の明確な結論はお知らせできないことになりました。また、この秋から教員は、学部でも大学院でもなく、「学術院」という独立した組織に所属することになりました。これはあくまでも教員の所属のみで、学生にとっての教育・研究機関である学部・研究科はそのまま続きます。われわれのように学部と大学院の担当箇所が異なる場合は、学術院を導入するメリットはありません。

教室では、堤先生が教授として最後の年を迎えられ、今年の春に脳梗塞で入院されましたが、いまは順調に回復されています。後任の方については、来年坂主任から紹介いただきましょう。若手では浅香 透助手が3年の任期を終え、小川研の岡田友彦助手が着任しました。岡田助手は粘土鉱物の吸着特性と環境浄化材料への応用を研究テーマとし、天然の資源のなかでも特に粘土鉱物の表面を利用して重金属イオンや有機化合物などの有害物質を濃集し、さらには有用な物質に転換するような材料を造ることを目標に日夜研究に専念しています。

思い起こせばこの6年間、1999年の6号館への移転、2000年度のカリキュラム大改革、学部改革構想委員会をまとめつつ、専修とかかわる大学院と学科の再編の可能性に一喜一憂してきました。いろいろと大変なこともありましたが、任期中に一番良かったのは、理工学研究科大学院に加わって15年経過し、やっと念願の学位(理学)を取得できるようになったことです。いまは教室一丸となって、新たな目標(地球科学を核とする新理学科・新研究科の設置)に突き進んでいます。簡単には事は進みそうもありませんが、どうか、今後とも、卒業生の皆様に暖かく、時には厳しく、見守っていただきたいと存じます。

### 教室便り (追記)

地球科学専修主任 坂 幸恭

稲門地学会会員の皆様には、記録的な猛暑に見舞われた今夏を乗り切りご健勝にてご活躍のことと存じます。

上に高木教授が述べているように、堤先生が退かれた後の専修で最長老となる私が再び主任を仰せつかりました。7月中旬の宵、6年間主任を務められた高木教授が主催する最後の教室会議で、すでに次期主任に決まっている円城寺教授に向かって私は「ま、ひとつ頑張ってください」と重々しく告げたものです。とこ

ろが、その教室会議直前の教授会で選ばれた次期学部長から円城寺教授に教務主任（学生担当）への就任要請がありました。教室は毎回のようにスタッフを執行部に提供しており、またまた大きな負担を強いられることとなります。しかし、今後の数年間は教室開闢<sup>かいびやく</sup>以来とあってよい大変な変革期にさしかかっています。教室のどなたかが学部全体の動向を展望できる執行部に参画していることも必要と考えて、教室をあげて同教授に激職就任をお願いすることとなりました。

その代替をどうするか——私にお鉢がまわってきました。定年まで窓際で日向ぼっこを、とたくらんでいたのがフイになってしまいました。（鞠子先生すみません）かつて鞠子先生が時折なざるポカを「マリポカ」といって嗤っていたのですが、斯くいう私も最近はポカだらけ。自嘲をこめて「サカポカ」と呼んでいます。頼りない限りですが、皆さんのご協力を得て、なんとか 2007 年度を迎えるまで大過なく務めたいと願っています。

このほど理学科再編計画の骨子がまとまりました。理学科は面目を一新して『宇宙地球システム科学科』となります。学生定員 80 名で地球科学を核として関連分野を網羅することになっています。具体的には、物理学・天体領域、化学・物質領域、地質学領域、地球環境科学領域、生物学・生態領域が素案にのぼっています。現地球科学専修の教員（堤教授の後任を含む）は全員その中核的な構成メンバーとなり、関連分野の教員が増員される見込みです。新学科では従来の地球科学各研究室・教科に加えてどのようなものを整備するか、についてはごく近く発足するはずの委員会で検討されます。順調に運べばこの学科は 2007 年度に発足し、地学-地球科学専修は発展的解消となります。私は最後の専修主任という栄に浴する(?) ということになるわけです。

## 研究室便り

### 堤研究室

内藤 圭祐・遠藤 雅志 (第 38 期)

今年度の堤研究室は、博士課程 1 名、修士課程 6 名、卒論生 6 名と、合計 13 名の研究者が、先生・OB/OG の方々の指導や助言の下、それぞれのテーマに関して日々盛んに研究に打ち込んでおります。

本研究室では、天然鉱物の研究・焼却灰の再利用、コンクリートのアルカリ骨材反応などのテーマに分かれておりますが、研究室においては自分のテーマにだけ耳を傾けるというのではなく、他の研究テーマに関する情報にも耳を傾け、疑問をぶつけあいながら、お互いを高めあっているという状況であります。特に、あるテーマに関する素朴な疑問というものは、その研究を行っている人間の予期しない疑問とも言えるので、テーマごとに分かれて話し合うのではなく、様々なテーマを研究する人間がお互いのテーマについて話し合うということで、人に説明する際や、卒論発表時にも役にたってくるのではないのでしょうか。

今年は、堤先生の最後の年ということもあり、先生の指導の際の言葉の節々からその意気込みが伝わってきます。先生は我々の学年の担任であり、長いことお世話になってきたので、期待に応えられるよう精一杯研究に打ち込んでいきたいと思っております。

## 坂研究室

上村 哲哉 (第 38 期)

今年度の坂研究室は PD2 名、修論生 2 名、卒論生 2 名と少な目です。しかしやる気のある 3 年生がゼミに積極的に参加するなど、中々活気があります。本年度の研究テーマは三重県度会郡南島町の四万十帯が主ですが、関東山地の黒瀬川帯も引き続き研究しています。夏期には研究室生の多くが三重県で奮闘しているでしょう。

坂先生は昨年からお酒を断たれていて、403 日間一滴も飲んでいないとのこと (7/9 現在)。愛煙家なのは変わりなく、学内はもちろんフィールドでも吸っていらっしやいます。先輩方は中学校の講師をされている PD、バレーボール好きで通風持ちの PD、寂しがりの M1、私とダイエット競争している M1 と、面白くてかつ親切な人たちばかりで、とてもありがたく思っています。

近況としては、先日実験機器や新型 PC が届き、益々研究しやすい環境になりました。マイペースな雰囲気ですが、今年はオリンピックがあるので例年より活気があり、忙しい年になるでしょう (?)

卒業生の皆様には近くにいらっしやる機会がありましたら是非研究室にお寄り頂いて、ご指導頂ければと思っております。また、1~3 年の後輩たちも気軽に研究室へ来てくれるようになると良いと思います。

## 平野研究室

清家 一馬・村上 亮 (38 期)

今年の平野研究室は博士課程 4 名、修士課程 12 名、学部生 5 名の計 21 名であり、地球科学専修最大の研究室となりました。それぞれの目標にむかって充実した研究生活をおくっています。

研究分野も益々多岐にわたり、炭素同位体比やリモセン、放散虫・有孔虫・渦鞭毛藻・花粉といった微化石、アンモナイト・イノセラムス・二枚貝類などの軟体動物に、脊椎動物分野も増えて、幅広くそして、多様性に富んだ楽しい研究室になりました。フィールドも日本各地に広がっています。

平野先生も、日本古生物学会での前会長講演や、中央教育審議会の会議、昨年からの中国での調査で、中国に行かれることもあり、日々お忙しい様子です。また、未来の科学者を育てるために小学館の絶滅古生物の図鑑の執筆にも力をいれています。

卒論生には、院生の方々も、お忙しい中での、丁寧かつ建設的なご指導に感謝しつつ、こうして研究室は積み重ねていくのだと感じます。OB のの方々もよくご訪問され、適切なアドバイスや面白いお話をしてください、とても勉強になります。

先生がよく口にすることばで“貴重な時間をたくさんかけて研究するのだから、自分自身で満足できるような研究をきなさい”というのがあります。それぞれの目標が違って、平野研究室は、みな自分の研究が好きで、それを他人に伝えられるという研究室であり、今後も研究室のメンバーと共に、皆様にこの研究室を支えていただけたらと思っております。

## 円城寺研究室

竹内 梨紗 (第 37 期)

今年度の円城寺研究室は例年よりも人数が多く、博士課程が 1 人、修士課程が 5 人、学部生が 12 人の合計 18 人という大所帯となっています。

私たちは円城寺先生のもと、トリアナ日々を送っています。先生の素晴らしき無駄でない知識には感心

させられるばかりで、先生のような雑学豊富な大人になれるように、私たちも研究のみならず、文学・音楽・スポーツと幅広いフィールドで活躍しています。

研究に対しても皆非常に熱心で、ゼミでは、時間が足りなくなるほど質問が飛び交い、熱い議論が繰り広げられています。また、今年のフィールドは先生とともに秩父に砂金取りに行ったり、北海道の豊羽鉱山に行ったり（今回は女性も二名参加！）と、他では決してできない貴重な体験をさせていただきました。還暦を迎えられてもまだなお日本中を飛び回り、お忙しくしておられる円城寺先生のお姿を拝見すると、私たちも負けてはいられない、という気持ちにさせられ、不思議と私たちを奮い立たせてくれます。

このようなアットホームな暖かい雰囲気の中でそれぞれの個性を活かし、ときには円城寺先生に厳しい喝を入れていただきながら、着実に知識を積み重ね、研究が実を結ぶよう日々精進しています。

### 小笠原研究室

清水連太郎

こんにちは、小笠原研の清水です。

研究室のテーマは去年までのカザフスタンの超高压変成岩とロッキー山脈の太古代基盤岩類の 2 本柱に加え、ヒマラヤの超高压変成岩も研究しています。顕微鏡、EPMA、Micro Raman、Micro FT-IR といった機器を活用して各自が研究を進めています。直径 20 ミクロンのダイヤモンドから、直径約 13000000000000 ミクロンの地球のなぞを解き明かす、たかだか数 10 年しか生きていない私たちが 3000000000 年前の岩石を知る、そういうロマンがいっぱいです。

今年度のメンバーは、修士 1 年 4 名、学部 4 年 4 名です。美人の先輩方が去年卒業してしまい、なぜか男ばかり…しかし熱くいい人ばかりです。修士 2 年以上の先輩がいないのですが、皆仲良く厳しくフォローしあってがんばっています。前期は東工大との合同自主ゼミを隔週で行いました。勉強すべきことが山のようにあるという現実を痛感させられています。かなりクールな研究室 T シャツも完成間近、ますますやる気ができます。

小笠原先生は論文・学会・講義などでかなり忙しそうなお中、熱心に指導してくださっています。また海外から研究者の来訪もあり、より刺激的な地球物質科学研究室となりそうです。これからも面白い研究を目指して一同がんばっていきたいと思います。

### 高木研究室

三輪 成徳 (第 38 期)

今年度の高木研究室は、博士課程 4 名、修士課程 6 名、卒論生 5 名の計 15 名が在籍しており、助手や PD の方々からも助言を受け、日々研究に励んでおります。研究テーマとしましては、剪断帯・断層・地震関連の構造岩石学的な研究から日本列島の地体構造関連のテクトニクス的研究まで、幅広い分野の研究を行っています。

また、学会や巡検への参加も積極的な本研究室では、春に淡路島巡検を兼ねて神戸での学会（構造研）に参加しました。巡検にハプニングは付き物で、今回も車のタイヤがパンクするというハプニングに見舞われました。また休憩時には皆でサッカーをするなど、研究とそれ以外の「メリとハリ」が売りの本研究室ではありますが、扱う岩石は「メリ」ばかりで、薄片作りに頭を悩ます今日この頃であります。

最近の研究室は夏を目の前に慌しくなっておりますが、高木研究室を引き続き応援またご指導のほどよろ

しくお願いいたします。

## 小川研究室

神原久美子（第38期）

今年の小川研は博士課程3名、修士課程13名、学部生4名の計20名によって構成されています。資源の有効利用および環境浄化を目的として様々な鉱物に着目し、新機能性材料の開発を目標に研究を行っています。テーマごとに6班に分かれ、隔週で先生を交えてディスカッションを行い、研究の成果と方針について話し合っています。ゼミは毎週行われ、プレゼンテーション能力の向上に努めています。

ゼミ合宿などではソフトボール、サッカー、テニスを行います。先生は「四十肩で…」とおっしゃいますが、メンバーの誰よりも活躍している姿には、脱帽です。研究室ではピッチャーを募集していますので、我こそはと思う人はぜひ小川研にいらしてください。

5月15日には小川研10周年記念パーティーが開かれ、先生の奥様、お子様を始め、多くのOB、OGの方がいらっしゃいました。飲み会では先輩たちからいろいろお話を聞くことができ、今後のためにも大変役に立ちました。

こんな小川研で過ごしながらか、卒論に向けて日々研究しつつ、多くのことを吸着していきたいと思っています。

## OB・OG 便り

### 思い出すのも恥ずかしいけれど…

吉田（旧姓 渡辺）かおる（21期）

恥の多い人生である。他人と比べて多い方なのかどうかは、比べたこともないので知らないが、主観的には、恥の多い人生に思える。恥ばかりかかっていると、恥をかくことなんか恐れなくなるのはいいけれど、恥をかくのをなんとも思わなくなる、という欠点も持つことになる。

山のような恥をかき分けて大学時代を思い返せば、三つの大きな恥を思い出すことができる。一つ目は、二年も浪人してやっと大学に受かったってことだ。一浪くらいならまだしも、二浪してしまったことは、やはり恥ずかしい。

二つ目は、卒論のタイトルの漢字を間違えたことだ。ただのケアレスミスで、友人から「このタイトルの字が違っているのは、それなりの意図があつたよな」と、かなり真剣な顔で指摘されるまで、気づきもなかった。それは、卒論を提出してしまった直後で、さすがに恥ずかしかったので、「もちろん、意図があつてに決まってるじゃない」と吹いたが、審査した教授で、そう思った人はいなかったらう。

そして三つ目だ。これが、私の中では一番恥ずかしいのだが、大学生にもなって、授業中お喋りをしたかどで、立たされたことだ。それは、大学に入学してまもなくのことで、私にとっては、久しぶりの学生生活。それもクラスには女子はたった三人であとは男子ばかりという、それまで経験したことのない環境にいきなり放り込まれ、あの頃の私は、ハイになっていたと思う。でも、自分は皆より年が上なのだから、それなりに大人に振る舞わなくてはと、頑張ってもいた頃だ。そんな中で、ついつい授業中におしゃべりをしてしまったのだ。やはり、急に大勢の男の子に囲まれて、ウキウキしていたのだと白状しよう。で、その授業と言う

のが、堤先生の鉱物学及び実験Iだった。

「その四人」。その時、非常に厳しい顔で、先生はおっしゃった。

「その四人、立ちなさい。大学生にもなって、授業中にお喋りで注意されるなど、恥を知りなさい」

教室中がしんと静まり返り、軽蔑オーラが、あたりの空間を埋め尽くすのを感じた。ごそごと立ち上がりながら、あまりの恥ずかしさに、めまいがした。いかにも温厚そうな（実際に堤先生は温厚な方であられるが）教授が、顔を赤くして怒っている。ばか丸出しとは、このことだと思った。

その後、先生は、入学したてで、どこか地に足がついていない私たちの態度を、重々しい言葉で戒められた。本当にその通りで、私はしばらく、頭を上げることが出来なかった。

その堤先生が、このたび退職されると聞いた。おしゃべりして立たされた堤先生の授業は私には難解で、だからこそ「ああ、これこそが大学だ」と、憧れのような気持ちを掻き立てられた、懐かしく、思い出深い授業だ。それを、来年の新入生からは受けられないのは、とても残念なことだと思う。けれども、先生の精神は、きっと伝統として受け継がれてゆくことだろう。

先生、長い間、本当にありがとうございました。授業中にお喋りして、本当にごめんなさい。今思い出しても、恥ずかしいです。

恥ずかしいと言えば、実は四月に、本を出してしまった。中学生を主人公にした、短編集で、とっても薄くて千円もする。それでも一応自費出版ではないので（毛が三本くらいしか違いがないけれど）、買ってもらえれば印税がちょっぴり入るので、誰か、損を覚悟で買ってもらえれば、とっても嬉しいです。

『夏草を渡る風』(碧天舎) 渡辺かおる著 (本屋かインターネットで注文してね)



## WWW と地球科学と私

澤口 隆 (第27期)

本年4月に、ソニー学園湘北短期大学・情報メディア学科に専任講師として就職いたしました。C言語やコンピュータグラフィックスの演習、ウェブ関連の講義を教えています。思えば卒論に取り組んだ1993年は、インターネットとWWW (World Wide Web) 元年とも呼べる年でした。高木研究室には総額100万円を超えるQuadra 800 + PostScriptプリンタが導入されたばかり。当時、平野研究室の住人と化していた某〇×さん(通称ロリさん)が「Mosaicというのがアメリカで流行っているらしい」との情報を聞きつけてきて、始まったばかりのWWWの世界に接続するために、夜な夜な試行錯誤を繰り返していたのが懐かしく思い出されます。初めてEメールを利用したのもこの頃です。あれから10余年。通信回線速度は軽く2,000倍を超え、ウェブサイトの数も世界で9,000万弱とも言われています。増え続ける情報の波に飲み込まれることなく、適切な情報の検索と取捨選択の能力が問われる時代となりました。地球科学の世界でも、火星上の探査ロボットから送られてくる映像をネットで閲覧したり、地震の予知現象とも捉えられる大気イオン濃度の変動や電磁波異常の観測データがリアルタイムで公開されたりするようになりました。また、近年のコンピュータグラ



フィックスの進歩は目覚しく(NHKスペシャル「地球大進化」をご覧になって驚愕された方も多いことでしょう)、空想するしかできなかったさまざまな自然現象を精密なシミュレーションとリアルな映像で見ることができるようになりました。

地球科学の分野とWWWの世界は、ある意味とても相性の良いものだと感じています。今後も、この2分野を横断した研究と教育に力を注いでいきたいと思っております。面白い話題がございましたらぜひご紹介ください。(tsawa@aoni.waseda.jp)

## 専門部会報告

### 理科教育部会からのお知らせ

木村 純 (第2期)

平成14年度(平成15年度会報で未報告だったため本号でさせていただきます。)

開催日:平成14年11月22日(金)

会場:早稲田実業学校(国分寺市)

出席者:大木則之(15期:都立戸山高校)、加藤 潔(21期:麻布高等学校)、加藤 進(15期:早稲田実業学校)、木村 純(2期:早稲田実業学校)、澤口 隆(27期:早大教育学部)、篠田晋治(1期:早大本庄高等学院)、田島丈年(27期:早稲田実業学校)、宮下 敦(15期:成蹊学園)、村松春彦(14期:桐朋学園)

内容:講演 CD-ROM教材「地底3千マイルの旅」の開発について[宮下 敦氏(15期:成蹊学園)]

紹介 大型フーコー振り子の製作[木村 純(2期:早稲田実業学校)]

その他 加藤 潔氏、篠田晋治氏より貴重な話題の提供がありました。

平成15年度

日程の関係で学校を会場とした部会は開催できず、忘年会を行いました。多岐に及ぶ話題で盛り上がりました。

開催日:平成15年12月6日(土)

会場:国立市

加藤 進(15期:早稲田実業学校)、木村 純(2期:早稲田実業学校)、田島丈年(27期:早稲田実業学校)、原 孝幸(14期:錦城高校)、村松春彦(14期:桐朋学園)

平成16年度部会開催予定

開催日:平成16年12月18日(土)

会場:未定

内容:講演 アイスランド報告[田島丈年氏(27期:早稲田実業学校)]

その他

本年度は上記のように開催できたらと考えています。現在開催会場は未定ですので、詳細が決まりましたら、メーリングリスト(理科教育部会)・郵送等でお知らせいたします。

### 鉱物専門部会便り

林 政彦 (第 12 期)

鉱物専門部会では、毎年 7 月の第 3 土曜日に理工学部において、山崎淳司氏 (15 期) と共に編集・発行している雑誌『鉱物情報』との共催で、国立科学博物館の松原聰氏による、“日本の新鉱物・新産鉱物”と題した特別講演を開催している。加藤昭氏 (国際鉱物学連合 IMA 新鉱物鉱物名委員会 CNMMN 元委員長) も毎回参加され、鉱物の情報交換の場として大いに役立っている。来年も開催を予定しているので、興味のある方は林 (E-mail: mhayashi@aoni.waseda.jp) までご連絡ください。

### 資源専門部会便り

古野 正憲 (第 19 期)

資源専門部会は、毎年 1 月上旬～中旬に「葉隠れ」(早稲田通りと明治通りの交差点付近)でやっている資源・エネルギー関連業界に携わっている稲門地学会 OB の単なる飲み会です。始まりは、当教室の「鞠子名誉教授のお誕生日を祝う会」として発足したのですが、いつの間にか 20 年近くやっております。稲門地学会の 1 期生から 30 期生くらいまで出席されますので、教室の縦の繋がりを深めるには良い機会が得られると思います。本会にご参加を希望される方は、下記の古野までご連絡下さい。次回からご案内を差し上げます。尚、その際にお名前のほか所属先、連絡先 (特に E-mail) 等もお知らせいただければ幸甚に存じます。

連絡先：日鉄鉱業株式会社資源開発部資源開発課

古野正憲 (FURUNO Masanori)

Tel: 03-3216-5281 / Fax: 03-3215-8480

E-mail: furuno@nittetsukou.co.jp

### 庶務からのお知らせ

◆来る 11 月 26 日 (金) 18 時 30 分より高田牧舎にて 2004 年度総会を開催いたします。詳しくは総会案内をご覧の上、同封の葉書にて出欠をご連絡下さい。

◆現在稲門地学会では卒業生名簿の改訂を検討しております。個人情報を取り扱う性質上、皆様にアンケートをお願い致したく存じます。つきましては同封の葉書 (兼総会出欠葉書) にご意向を記入の上、ご返送下さいますようお願い申し上げます。

◆堤 貞夫教授ご退職に際し、2005 年 2 月又は 3 月に最終講義を行う予定です。また、地球科学専修及び稲門地学会共催で『堤先生を囲む会』を開催する予定です。詳しい日程が決まり次第追って連絡致します。

## 会計からのお知らせ

加藤 進 (第15期)

会計報告 (2001年度～2003年度)

2001 (平成13)年度 稲門地学会 会計報告 (9月以降分も含む)

収入		支出	
前年度繰越金	¥2,747,431	01年度卒業生お祝い金	¥30,000
会費 (卒業时会費)	¥20,000	02年度入学生お祝い金	¥20,000
会費 (20年会費:14期まで)	¥180,000	会費振込み手数料	¥1,400
利子	¥977	会報印刷発送費 (業者)	¥245,700
総会残金	¥60,710	印刷・用紙費	¥83,946
		通信費 (葉書・切手代)	¥55,000
		会員データベース修正費	¥15,000
		雑費	¥1,438
		次年度繰越金	¥2,556,634
			支出合計
			¥452,484
	¥3,009,118		¥3,009,118

2002 (平成14)年度 稲門地学会 会計報告

収入		支出	
前年度繰越金	¥2,556,634	02年度卒業生お祝い金	¥30,000
会費 (卒業时会費)	¥0	03年度入学生お祝い金	¥20,000
会費 (20年会費:15期まで)	¥210,000	会費振込み手数料	¥1,470
利子	¥139	会報印刷発送費 (業者)	¥281,420
総会残金	¥15,050	印刷・用紙費	¥30,095
		通信費 (葉書・切手代)	¥1,100
		会員データベース修正費	¥15,000
		雑費	¥335
		次年度繰越金	¥2,402,403
			支出合計
			¥379,420
	¥2,781,823		¥2,781,823

2003(平成15)年度 稲門地学会 会計報告

収入		支出	
前年度繰越金	¥2,402,403	03年度卒業生お祝い金	¥30,000
会費 (卒業时会費)	¥20,000	04年度入学生お祝い金	¥20,000
会費 (20年会費:16期まで)	¥180,000	会費振込み手数料	¥1,400
利子	¥22	会報印刷発送費 (業者)	¥286,215
総会残金	¥26,670	印刷・用紙費	¥53,442
		会員データベース修正費	¥15,000
		慶弔費	¥16,170
		雑費	¥8,118
		次年度繰越金	¥2,198,750
			支出合計
			¥430,345
	¥2,629,095		¥2,629,095

## 2004年・2005年度 稲門地学会役員・幹事 (暫定)

### 役員

- [会長] 坂 幸恭 (教職員)  
 [副会長] 原 雄 (2期), 林 政彦 (12期)  
 [庶務] 米持 賢治 (教職員・15期)  
 [会計] 加藤 進 (15期), 戸高 法文 (12期)  
 [監査] 平野 弘道 (教職員), 高野 良一 (1期), 筑紫 恒男 (2期)

### 幹事

- [教職員] 坂 幸恭, 米持 賢治  
 [1期] 篠田 晋治, 高田 徹夫 [2期] 筑紫 恒男, 古川 雅彦  
 [3期] 川島 眞一 [4期] 石田 吉明, 篠崎 貞  
 [5期] 伊藤 和男, 酒井 健, 福田 正光 [6期] 市毛 芳克, 三宅 克行  
 [7期] 中泉 徹 [8期] 山崎 次郎, 若林 直樹  
 [9期] 稲田 敬, 池田 則生, 村野 隆 [10期] 大橋 信介, 塩澤勝太郎  
 [11期] 品田 進司 [12期] 安藤 寿男, 戸高 法文, 林 政彦  
 [13期] 泉谷 泰志, 佐野 浩, 永井 保弘 [14期] 野々口 稔, 村松 春彦  
 [15期] 加藤 進, 小池 豊, 宮下 敦 [16期] 磯上 篤生, 宇田川義夫  
 [17期] 市川 昌則, 長谷部直人 [18期] 田中 義洋  
 [19期] 金澤 義人, 古野 正憲 [20期] 嘉戸 章江, 瀬谷 正巳, 西堀 一彦  
 [21期] 風間 武彦, 加藤 潔, 森岡 右伍 [22期] 大森 聡一, 塚田 裕子  
 [23期] 堀田 照久, 安田有希子 [24期] 安藤 生大, 小林 健太  
 [25期] 荒木 康彦, 松田 達生, 三浦 玲子 [26期] 梅田 朝美, 山上 順民, 頼 雨新  
 [27期] 石井 明仁, 田島 丈年, 三輪真一郎 [28期] 中村 一夫, 野口 眞弓, 山本 浩万  
 [29期] 島田 耕史, 高橋 一晴 [30期] 小林 靖広, 曹 奎煥  
 [31期] 浅井 志保, 安藤 康行, 太田 雅仁 [32期] 水野 崇, 梶川 直  
 [33期] 馬場 恵里, 細見 幸信 [34期] 向 充美, 吉岡 伸浩  
 [35期] 今村 恭子, 井上 恭豪 [36期] 大泉 満彦, 田中 智史  
 [37期] 加納 大道, 坂 秀憲

### 運営委員

- [総務] 篠田 晋治 (1期), 木村 純 (2期), 原 雄 (3期), 川島 眞一 (3期)  
 [総会] 井岡 大和 (3期), 塩澤勝太郎 (10期), 林 政彦 (12期), 田島 丈年 (27期)  
 [名簿] 松村 春彦 (14期), 米持 賢治 (教職員・15期)  
 [会報] 宮下 敦 (15期), 新井 宏嘉 (29期)

### 稲門地学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1  
早稲田大学教育学部地球科学教室内

TEL : 03-3208-8473 / FAX : 03-3207-4950

[http://www.dept.edu.waseda.ac.jp/earth/index\\_j.html](http://www.dept.edu.waseda.ac.jp/earth/index_j.html)

e-mail : [earth@edu.waseda.ac.jp](mailto:earth@edu.waseda.ac.jp)

編集代表：新井 宏嘉（教職員・29期）

編 集：宮下 敦（15期）

題 字：大杉 徹（名誉教授）